

インド経済視察団

11月13日(日)～11月20日(日)の8日間、中経連は豊田会長を団長、水野副会長、小川副会長、友添中部国際空港(株)社長を副団長、小川専務理事を団事務局長とする総勢36名の経済視察団をインド3都市(バンガロール、ムンバイ、デリー)に派遣した。

今回の経済視察は、「輸送機器」「IT」「インフラ」「教育」などをテーマに視察先を選定し、現在のインドの生の情報を収集するとともに、インド人の仕事や学びの姿勢から、インド経済の発展と将来性を考えることを目的とした。



訪問先では、各テーマの現状・課題について聴取し、団員からは経営者の立場で活発な意見交換が行われ、多くの知見・理解を深めることができた。

また、ジェット・エアウェイズに対してエアポートセールスを実施し、中部国際空港への路線開設について要望活動を行った。

各都市での視察概要

バンガロール

1. トヨタ・キルロスカ・モーター(TKM) (トヨタ自動車 現地法人)



同社は1997年に設立され、2000年より生産を開始。立花社長より同社の概要や市況の説明を受けた後、工場を見学。また、敷地内に設立されたインド版トヨタ工業学園(TTTI)も視察。同校は全寮制の技術高校で、成績優秀ながら経済的事情により進学が難しい若者に無償で教育機会を提供している。3年の課程の中で、技術をはじめ、集団生活を通じて日本式の考え方やチームワーク等“心身”の教育にも力を入れており、卒業生のほとんどがトヨタグループに就職している。

2. トヨタ インダストリーズ エンジン インディア (TIEI) およびキルロスカ トヨタ テキスタイル マシナリー (KTTM)

(共に豊田自動織機 現地法人、TIEIはエンジン、KTTMは精紡機を生産)



KTTMは1995年にトヨタグループとして初めてインドに進出。TIEIは2015年にKTTMから分離する形で設立された。TIEIの栗本社長およびKTTMの志水社長より企業概要の説明の後、両社の工場を見学。工場内には“改善道場”が設置されており、現地スタッフの様々な創意工夫が現場に活かされていた。また、現場の班毎に「安全」「環境」「品質」等を管理するKPIボードが設置されており、日々のアウトプットが明確化されているなど、目標達成に向けた様々な工夫が施されていた。

ムンバイ

3. タタ・コンサルタンシー・サービシズ(TCS)

同社はインド最大のIT企業で全世界の従業員は約37万人。IBM・ACCENTUREと同等の規模を誇っている。自らを自動車業界のTier0.5と呼び、自動車メーカーに代わって部品の開発、調達等を受託代行するなど従来のITソフト企業の枠を大きく超えた事業を展開。企業概要の説明の後、社内を見学し、航空機・自動車メーカー、電力・水道会社向けに提供している各種ITサービスについて説明を受けた。

4. ジェット・エアウェイズ



同社はムンバイを拠点にしたインド最大手の民間航空会社。豊田団長や友添副団長がシャムガムCCO

(最高コマーシャル責任者)と面談し、中部国際空港ーインド路線の開設を要望した。先方からは「東アジア方面への路線計画を検討すべき時と考えている。中部は路線開設に資するポテンシャルがあると思うので、今後も密接に情報交換を継続したい」との回答があった。

デリー

5. デリーメトロ視察



円借款事業として1998年に着工、完成済み路線は東京メトロ相当の約200km。運用面を含め、「安全」「定時

性」「快適」な鉄道システム等、まさに日本式の“質の高いインフラ”が提供されている。JICAインド事務所の坂本所長の説明を受けた後、実際に地下鉄に試乗した。

6. 在インド日本国大使館ブリーフィング

平松特命全権大使、JETROニューデリー事務所の野口所長、JICAインド事務所の坂本所長から、それぞれ「最近の日印関係」「インドの投資環境と進出日系企業動向」「対インドODA事業とビジネスリスク低減への示唆」をテーマにご講演いただいた。平松大使からは、「日本から見たインドの地政学的・戦略的重要性」「安倍首相とモディ首相の良好な関係」「国土・人材に恵まれ高い経済成長が継続するインドは組みすべき相手」等のお話を伺った。

7. マルチ・スズキ・インディア(マネサール工場)

同社は1982年にインド国営自動車メーカーと合



弁・ライセンス契約を結び、1983年よりマルチ800(アルト)の生産を開始。今回訪問したのは2006年に操業開始したマネサール工場で、敷地面積は240万㎡を誇る。インドに進出しているTier1からの供給を受け、部品の現地調達率は95%を超えている。鮎川社長からの説明の後、工場を見学した。工場はラインを一直線にしたり幅を狭くすることで、車両や部材の動きを極力減らす等、様々な工夫を凝らしたレイアウトになっていた。

8. インド工科大学デリー校(IIT-D)



1947年にネルー初代首相が創立。同校はインド全国にある22のインド工科大学の1校であり、インドの科学技術の基礎を担っている。1990年代後半から卒業生の大半が渡米し、米国大学院で優秀な成績を独占したことをCBSが放送したことが契機となり、世界にIITブランドが浸透。100倍超の難関を突破し入学した学生は、IT・金融・コンサルティング業界、最近では海外企業のインドでのスタートアップ幹部要員等に幅広く就職している。バラクリシュナン副学長等と面談し、意見交換を行い、先方からは「日本の経済界・企業との交流を増やしていきたい」「中部の企業にはぜひインターンを受け入れて欲しい」との要望があった。意見交換の後、キャンパス内を見学した。

(国際部 和田 耕一郎)

2016 昇龍道(中部・北陸)物産観光展

11月17日(木)～11月29日(火)の13日間、昇龍道(中部・北陸)物産観光展実行委員会(事務局:中経連、中部(東海・北陸・信州)広域観光推進協議会、北陸経済連合会)は、タイのバンコク伊勢丹にて「2016 昇龍道(中部・北陸)物産観光展 ～SHORYUDO(Chubu & Hokuriku) Food and Tourism Fair～」を開催した。

本物産観光展は、昇龍道(中部・北陸)9県と、観光団体、経済団体等が一体となり、海外で農林水産物・食品をPRし、輸出促進・販路拡大に繋がるとともに、「昇龍道」の優れた観光資源をあわせてPRすることで、さらなるインバウンド効果を高めていくことを目的としたイベントである。



会場の様子

伊勢丹6階の催事場『ごちそうスペース』では、和洋菓子、珍味、味噌、漬物、手羽先、次郎柿やりんごなどの果物等を販売、ひつまぶしや寿司を提供するイートインコーナーも設け、22社が出展した。また、同スペース内に観光PRカウンターを設置し、タイ語版の各種パンフレットやDVD映像等で昇龍道の観光地を紹介した。

初日は、現地のメディア関係者を招いて試食会を行い、ホテルイカの干物、手羽先、ひつまぶし、次郎柿など、昇龍道の名産品を味わってもらったとともに、この地域の魅力的な観光地を紹介し、知名度向上を図った。



メディア関係者への試食会の様子



本物産観光展の売上は、約258万パーツ(約810万円)、来場者数は約1.3万人、9割以上がタイ人客だった。また、今回は500パーツ以上お買い上げのお客様を対象に、抽選で昇龍道9県の特産品をプレゼントする企画を打ち出し、多くのお客様が抽選会に参加した。商品については、一部の洋菓子や次郎柿が完売した他、和菓子、珍味、味噌、ひつまぶし等が好評だった。

観光では、白川郷、高山、立山黒部アルペンルート、地獄谷野猿公苑、金沢の他、桜や藤、紅葉が見られる観光地と時期に関する問い合わせが数多くあった。また、日本で大ヒットしたアニメ映画『君の名は。』がタイでも人気を博しており、特にタイ人の若者からその舞台となった飛騨市や諏訪湖に関する問い合わせが相次ぐ等、日本文化への関心の高さを実感した。

なお、本物産観光展は、タイ国王陛下崩御後にタイ政府から発表があった「娯楽的活動・祝い事を30日間自粛」の後に実施された。事前の広告・プロモーションが制約され、また服喪により消費マインドが低下する等、影響が懸念されたが、売上は前回は上回り、当初に設定した目標額に近い水準を達成することができた。前回は物産と観光が違うフロアにあったが、今回は1カ所に集約し、昇龍道の「食」と「観光」の魅力を一体的にPRできたことがイベントの活性化にも繋がった。

来年度以降も関係自治体や観光団体等と連携し、昇龍道の「食」と「観光」の魅力発信に努めていく。

(産業振興部 水田 晴久)